

~~~~~  
論 説  
~~~~~

トランスランゲージングの遂行性 国際的なトークショーのディスコース分析を通して

猿 橋 順 子*

坂 本 光 代**

1. はじめに

近年、バイリンガルやマルチリンガルを個別の言語能力の併存と捉えず、包括的な言語レパートリーを言語資源として有する存在と見なすトランスランゲージング (Garcia & Wei, 2014; 加納, 2016a, b) の概念が提唱されている。トランスランゲージングは、多言語話者の言語能力について、言語間の境界線を超越した、第一言語 (L1) でも第二言語 (L2) でもない、ひとつの独自の言語システムから成るものと想定し、話者は必要に応じて自分の持ち備えた言語システム全てを駆使して言語活動にあたるとする。ひとつの繋がった言語システムの存在を前提とするトランスランゲージングは、L1 と L2 を行き来すると考えるコードスイッチング (Myer-Scotton, 1993) と一線を画す立場を取る。

このように、言語の存在論の転換を含むトランスランゲージングという発想は、言語に対する態度や、話者間の関係性にも影響を及ぼし得る。すなわち、母語話者を、言語規範を持つ者と見なすことや、多言語環境で「どっちつかずの言語」や中間言語と見なされてきた言語コードへの見直しを促す。それは、ホスト社会の言語を習得するうえで控えられる傾向にあった移民の継承語使用について、言語資源としての活用を見出そうとする。さらに、言語学習者のエ

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

** 上智大学外国語学部教授

ンパワーメントにも繋がり得ることが期待されている。

人々が言語レパトリーを駆使し、必要と状況に応じて言語を使用するという見方は、人の移動をめぐる社会言語学的諸課題と密接に関連し、早くも言語指導の場に応用されている¹⁾。他方で、トランスランゲージングは理論的にも方法論的にもまだ検討すべき面が多くある。そこで、本論では、トランスランゲージング研究を概観した上で、補完すべき点を整理し、事例のディスコース分析を通してトランスランゲージングという社会実践の有り様を検討する。なお、本論で紹介する事例調査とデータ分析は猿橋が単独で行い、理論面の検討を猿橋、坂本で行った。

2. トランスランゲージングとその研究課題

2.1 トランスランゲージングとは

トランスランゲージングは、「別言語として社会的に構築された言語特性を、ひとつの言語レパトリーとして使用する」(Garcia & Wei, 2014, p. 2, 筆者試訳)ことを指す。名付けられた言語を閉じられた体系として捉え、2つの言語体系を行き来することをバイリンガル、3つ以上の場合をマルチリンガルとする従来の言語観からの脱却を出発点とする概念である。言語名の多くが国や地域の名を冠しているのは、共同体を構成する上で地理的な条件が大きな決定要素となってきたことの反映である。近年のグローバル化は、人や物、情報の大量移動を加速させ、デジタル通信技術の発達は、対人関係と情報伝達における物理的な隔たりを凌駕するかに見える。それに伴い、人々の相互作用や、言語と共同体の結びつけられ方、帰属意識やアイデンティティの形成過程にも変化が生じていると考えられる。そのような変容の只中において、国や地域と言語を分かちがたく結びつけ、閉じられ、安定した言語世界を前提とした従来の言語観では、人々のコミュニケーション実践を的確に捉えることは難しいのではないか。トランスランゲージングは、このような問題意識から提案された概念の

1) たとえば、日本語の作文に取り組むイギリス人留学生を対象とした研究(加納, 2016a)、ろう教育への提案(佐々木, 2015)など。

ひとつと言えよう。複雑かつ活発な可動性を持ち、著しく多様化する社会²⁾において、開かれ、動的に交叉することが言語の常態であるとするのが、トランスランゲージングの言語観である。

すなわち、トランスランゲージングとは、X語やY語といった言語の範疇にとらわれずに、過去の経験を通して蓄積された言語レパトリーを言語資源として用い、相互作用の中で意味づけを行い、言語資源を更新していくという言語実践である。そこでは、既存の何語にも分類し得ないような表現や用法が生まれ、語義は元来のものとかげ離れることもある。それならば、トランスランゲージングは従来から見られる言語実践とも言えよう。このような言語実践は、主に言語接触、言語変容、言語混淆などの研究領域において注目され、説明されてきた。ただし、そこでは学術的にも社会的にも、X語とY語とそれぞれの言語世界を所与として説明され、変容や混淆は言語の乱れや亜種、創造と見なされてきた。すなわち、単一言語世界が無標で、言語接触によって他の言語の影響を受けることが有標とする見方を基底としていた。

トランスランゲージングの考え方は、グローバル化に伴う現象を捉えた他の社会言語学からの提案と軌を一にしている。個々の言語を、閉じられた体系とする言語観の転換を促すという面では、crossing (Rampton, 1995), polylingualism (Jørgensen, 2008), metrolingualism (Pennycook & Otsuji, 2015) 等の概念にも通じるという (Garcia & Wei, 2014; Blommaert & Rampton, 2016)。各方面から類似の提案がなされるなかで、トランスランゲージングが特に注目する点は、不均衡な力関係と国家主義的イデオロギーに関連した言語的意味づけの転換の促しにあるという (Garcia & Wei, 2014, p. 43)。

これらの可能性を指摘した上で、Garcia & Wei (2014) は、教育領域への応用を提案する。すなわち、移民の子ども達は、教室内の言語を第二言語として学ぶ存在となるわけだが、教室内言語を第一言語とする教員や級友からは、移民の第一言語の言語資源としての価値は看過される傾向にある。トランスラン

2) Vertovec (2007) が描く社会の顕著な多様性 (superdiversity) は、社会言語学にも示唆をもたらしている (Blommaert, 2010)。

ゲーシングを言語実践の常態として捉える見方が一般化することで、ホスト言語・ゲスト言語、多数派言語・少数派言語、第一言語・第二言語といった、人々が所与として持っている言語間階層およびそれが投影されることで再生産される集団内の階層関係も是正されることが期待されるというわけである。

2.2 トランスランゲーシングの課題

ただし、トランスランゲーシングという概念には検討すべき課題も多くある。第一に、従来の見方との共存可能性の検討である。Garcia & Wei (2014) はトランスランゲーシングは、バイリンガリズムを退けるのではなく、「変容が促されるべき」(p. 17, 筆者試訳)と主張している。しかし、言語そのものの存在論を転換することを提案するトランスランゲーシングが、いかにバイリンガリズムからの移行を促し、達成し得るのか。あるいは、どのように併存し得るのか。その過程についての検討は、まだ十分になされていない(Sakamoto & Saruhashi, in press)。

また、トランスランゲーシングは言語に対する見方や価値観の変容という意味において、言語イデオロギーの転換と言い換えることができよう。言語イデオロギーは、言語使用、言語努力(言語政策)と共に社会の中の言語を構成し、相互作用する三大要素のひとつとされている(Spolsky, 2009)。言語に対する態度や価値観は、言語使用に影響を与え、言語政策の方向性を決定づける。同時に、理念先行の言語政策は定着せず、失敗に終わる傾向があることも指摘されている(Neustupný, 1994; Wright, 2016)。そのため、言語政策は、人々の言語使用、すなわち談話を起点に転換を促すことから始めなくてはならないとの指摘もある(Neustupný, 1994)。言語観の転換に着目するトランスランゲーシングは、まず具体的な談話の中で、バイリンガリズムからトランスランゲーシングへの移行がどのように行われているかを見ていく必要があるだろう。

第二にさまざまな社会領域、特に公共の領域におけるトランスランゲーシングの実践例を見出し、研究する必要性である。トランスランゲーシング研究の事例は、これまで比較的、構成員が固定されている場面・状況でのやりとりを

事例とすることが多かった (e.g. 韓, 2018; Garcia & Wei, 2014; Creese & Blackledge, 2010)。そこでは蓄積された関係性や、すでに了解された互いの位置づけ、その集団ならではの意味の共有がしやすいと考えられる。そのような場面で、言語間の境界を意識させないような会話は成立しやすく、許容されやすいと考えられる。前述の通り、トランスランゲージングを広く学界に紹介するきっかけとなった Garcia & Wei (2014) は教室の場面を主な事例としている。教室場面は、仲間内の会話よりは制度化された場面と言えるが、限られた人数で、特定のメンバーが一定の期間を共に過ごすため、クラス独自の関係性や了解事項も定着していくものと考えられる。もちろん、これらの研究は、トランスランゲージングが言葉の乱れや、中間言語ではなく、理に適った創造的な言語実践であることを例示する上で意義がある。

しかし、トランスランゲージングの研究例が比較的固定的な、内輪の場面にとどまっていたのでは、社会言語学において連綿と探究されてきたダイグロシア (Ferguson, 1959; Fishman, 1967) や、精密コードと制限コード (Bernstein, 1972) の範疇にとどまるものともなりかねない。限られた教室内でのみ許容されるトランスランゲージングならば、移民の子ども達は、その教室内では第一言語も言語資源として活用できるものの、教室の外ではそれが通用せず、結果的にはダブルスタンダードを乗り越えていかなくてはならなくなる (Sakamoto & Saruhashi, 2018)。今後のトランスランゲージングの可能性を論じる上では、より動的な不特定多数の人が出会う場や、公共空間での現象も丁寧に見ていく必要があると考える。

第三にトランスランゲージングが力関係の変容に及ぼす影響については、各場面の文脈に応じて詳細に見ていく必要がある。Garcia & Wei (2014) は、学校の教室内で移民の子ども達がトランスランゲージングを肯定されることで励まされる一面を例証している。トランスランゲージングがもたらし得る、成員間の関係性への作用は重要である。しかし、この教師と生徒の関係性の事例からトランスランゲージングがいつも不均衡な力関係の是正を実現すると言うことはできない。従来、見落とされがちであった言語実践に光を当てたり、言語

に対する見方を転換するわけだから、力関係の書き換えを誘発することは想像に難くない (Sakamoto & Saruhashi, in press)。しかし、どのような力関係の書き換えが誘発されるかは、その場の状況や、話者が予め持っていた関係性、以前から言語に付与されていた地位やイメージなどを把握した上で、見ていく必要があるだろう。すなわち、トランスランゲージングという行為によって遂行されることは何なのかという観点に立ち、場面の設定、話題、参加者とその関係性など、文脈を考慮した解釈が求められる。

最後に、方法論上の課題である。既存の事例研究の中では、一方でトランスランゲージングを提唱しながら、トランスランゲージング場面の分析では、名付けられた既存の言語類型に沿って分析をしているものが少なくない。これまでの言語研究が、おしなべて名付けられた言語名のもとに発展してきたことを考えると、やむを得ない一面でもあると言えよう (加納, 2016b)。Rampton (2016) は閉じられた言語体系に代わる言語観を滋養することを志向した研究であっても、すでに社会の中に浸透している従来の言語観に縛られずに分析することの難しさと不適切さを指摘している。研究者から見て、トランスランゲージング場面を産出していると思なされる話者が、従来の言語観から脱却しているとは限らないからである。そこで、Rampton (2016) は、従来の言語観では取まりきれない現象を分析する際には、従来の言語観に則った視点と、談話の遂行性に重点を置いた視点の両方を複眼的に用いていくことを提案している。そのような分析を通して、閉じられた言語体系という言語観から脱却するということは、どういうことなのかということを研究者自らが経験することが可能になる。

このような問題意識に立ち、本論では具体的な言語実践から、教室内よりも相対的に公の場面で、トランスランゲージングが観察された場面に注目する。なかでも、バイリンガル場面として設定されていた場で産出されるトランスランゲージングに注目することとした。2つの言語実践を対比させることが可能になると考えたからである。このような言語実践場面のディスコース分析を通して、トランスランゲージングによって遂行されることは何なのかを探究する

ことを目的とする³⁾。

3. 研究手法と事例概要

既存の言語類型のみにとらわれずに、トランスランゲージング場面の発話が、コミュニケーション場面にどのような作用をもたらしたかを探究するために、ディスコース分析を採用する。ディスコース分析は、人々の話すことや書くことを社会的行為と捉え、表現や文章のつながり方や継起順序を手がかりに理解される意味と、特定の文脈における言語の使われ方に注目する (Gee, 2014)。それにより、人々が何を重視し、どのように慣例的・文化的な行動を取り、どのようなアイデンティティや対人関係を示し、いかに社会的財の分布や物事と物事の関連性を促し、知の体系がどのようなものであるかなど、コミュニケーション行為によって遂行される様々な事柄を多角的に探究していこうとする研究法である (Gee, 2014)。特定のコミュニケーション場面において何が遂行されたのかを網羅的に探索するディスコース分析は、参加者が名付けられた言語の枠組みに依拠しながらコミュニケーション行為を取るときと、そこから離れている場面とを対比させながら、両場面で遂行されていることの特徴や差異を抽出することが可能になると考えられる。

本論で事例として取り上げる場面は、東京都渋谷区の代々木公園で2017年3月に開催されたアイ・ラブ・アイルランド・フェスティバル (以下、フェスティバル) のトークショーからの抜粋である。フェスティバルは、アイルランドのセント・パトリック・デイの祝祭に合わせて、毎年3月の週末に開催される。アイルランドに関連した食品や物品を売る露店が並び、文化体験ができる場が設置され、舞台では歌や踊りが上演される。日曜日には表参道が車両通行止めとなり、大規模なセント・パトリック・パレードが行われるが、その拠点ともなっており、終日賑わう。

フェスティバルは誰もが出入り可能な公園で開催され、参加費なども徴収し

3) 談話の遂行性に注目する本論では、コミュニケーション場面の分析において間主観的な立場に立っている。

ていない。そのため、フェスティバルを目的に集まる人もいるが、たまたま通りかかって足を止める人や、フェスティバルを横目に見ながら通過するだけの人など不特定多数の人々が介在する。こうした流動性や公開性、公共性がある一方で、国名を冠したフェスティバルということから、国を代表した発言や演出も多く見られる。特にメインステージは、フェスティバルの中核をなしており、予め公開されている時間割に沿ってプログラムが展開されていく。

このように、フェスティバル会場には様々な相互作用場面が認められる⁴⁾。一見、混沌とした場にも見えるが、Goffman (1983) が提示する相互作用秩序の枠組みに照らすと、ある程度の整理が可能となる。

1. 単独 (singles) あるいは連れ立つ人々 (withs)。単なる通行人となることもあれば、人の流れや行列を構成する場面もある。
2. 目的や一貫性のある接触 (contacts)。電話応答や挨拶を交わす場面など。
3. 相互依存的な小集団。初対面でも役割や慣習を互いに了解している。接客場面など。
4. 舞台形式 (platform format)。活動とそれを見る観客で成り立つ。やや制度化されている。
5. 祝祭行事 (celebrative occasions)。予め参加者や進行が設定されている。制度化されている。

フェスティバル会場では、単独で会場を歩く人もいれば、何人かで連れ立っている人々もいる。彼らは個々に参加者であるが、人気商品の前では行列をつくりだす。フェスティバル会場には、久しぶりに出会って声を掛け合う人々や、イベントの成功を互いに祝いあう人々も見える。彼らは手短かに言葉を交わした後、それぞれ元の場所に戻っていく。立ち並ぶ出店は一目で何を営業しているかが分かるように提示されており、通行人はいつでも客として期待されてい

4) 国名を冠したフェスティバルの特徴や、コミュニケーション過程の研究に猿橋 (2017, 2018), 猿橋・岡部 (2017) がある。

トランスランゲージングの遂行性

る相互作用秩序に参加することができる。舞台形式の活動は、メインステージのみならず、あちこちで設定され、活動を披露する人と、それを見る側の存在で成り立っていることが確認できる。

このような数多くの相互作用の中から、本論では相対的に制度化の度合いが高いメインステージでの相互作用に注目する。メインステージは他の場所で展開される舞台形式よりも公式であることが舞台の広さや高さ、通訳の配置、観客席の設置とその広さなどによって認められる。一方で、観客の出入りや、観客に期待されていることは緩やかで、Goffman (1983) が類型化した祝祭行事に比べれば制度化の度合いは低いと言えよう。加えて、通訳が配置されていることは制度としてバイリンガル場面が想定されていることが確認される。そのような場で、産出されるトランスランゲージングに注目してみたい。

表1は2日間のメインステージのプログラム概要である。18プログラム中、音楽が最も多く7つ、続いてダンス、式典、トークショーが各3つずつ、ファッションショーが2回開催された。メインステージには終日司会兼通訳が配置されていた(後述の参与者BM)。

表1 メインステージプログラム概要

1日目	2日目
1. 音楽	10. ダンス
2. 音楽	11. 音楽
3. 音楽	12. ファッションショー
4. 式典(開会式)	13. トークショー
5. ファッションショー	14. 式典(エコ事業)
6. ダンス	15. トークショー
7. トークショー*	16. ダンス
8. 音楽	17. 式典(閉会式)
9. 音楽	18. 音楽

* 網掛け部は本稿参照事例

式典とトークショーは話すことで成り立つイベントであることから全体の発話量も通訳場面も他のプログラムより格段に多くなるが、なかでも式典は公式性の高さにより通訳は予め翻訳された原稿を読む時間が長かった。一方で、トークショーに詳細な台本は用意されておらず、その場で相互作用が産出されていく様子が確認された。トークショーのテーマは、3回ともラグビーで⁵⁾、これは日本でのラグビーワールドカップ開催を2019年に控えているのに加え、ラグビーがアイルランドの人気スポーツであることが関連づけられていた。なかでも初日のトークショー(表1、網掛け部)はフェスティバル初回のトークショーであり、コミュニケーション場面の調整を参加者がその場で行う場面がみられた。すなわち制度的にはバイリンガル場面が設定されていたわけだが、実際には流動性が認められ、その中でトランスランゲージングに移行する場面も見出された。そのため、本論では当該事例について詳細な分析を行うこととした。

図1はトークショーの配置図である。舞台上には左から、総合司会者が2人、トークショーに参加するゲストが5人並んでいた。総合司会者は日本語話者でメイン司会者の男性JMと、日英語バイリンガルでメイン司会者(JM)の司会補佐および通訳を担当する女性BMである。トークショーで多く発言をするのは、ラグビー関連団体の役員を務めるJS1と現役ラグビー選手のJS2である。二人とも男性である。彼ら二人を挟んでミス・アイルランド(IE)とミス・日本(JS3)の二人の女性が列席しているが、ラグビーと特段の関係はない様子である。一番右端のBSは、このトークショーの企画調整も行ったイベント運営会社の長であり、フェスティバル全体の運営も担っている。その旨も併せて、この場では通訳としての参加であることがJMによって紹介された。

また、トークショーでは観客との相互作用も少なからず確認された。すなわち、本事例の参加者は、舞台上7人と観客という8主体であり、その相互作用はかなり複雑となることが想像されるだろう。実際のトークショーではBMと

5) 重複して登壇する人もいたが、主題については日本代表男子(第1回)、日本代表女子(第2回)、ストリート・ラグビー(第3回)と異なっていた。

トランスランゲージングの遂行性



図 1: トークショー会場の配置図

JS3 はほとんど発言しなかった⁶⁾。次節のデータ分析では、総合司会者の JM と、このフェスティバル全体および企画の立役者でありつつ通訳として同席する BS、日本語を解さない IE と、情報提供者の JS1 と JS2、および観客 A の 6 主体が主な関与者となる。

国を掲げた催しでは、厳格なバイリンガル場面となることが少なくない。国のトップが対談するような場面では、予め通訳を配置するのが一般的である。相手国言語の使用は挨拶などに限定され、それは伝達機能よりも友好のシンボルとしての機能が大きい。通訳を介さずに直接対話することは、両者の関係がリラックスしていることの表れとして報道の注目点となることもある。こうした慣行はアイルランド・フェスティバルのような国を掲げたフェスティバルでも確認される。開会式や閉会式は、列席者に通訳が居並ぶことで、公式であることを広く印象づける。本事例のトークショーでも、それぞれの分野や国を代表する人々が選ばれ、通訳者が二人 (BM と BS) も同席していることから、公式性の高いバイリンガル場面となることが予測される状況に見える。実際には、トランスランゲージングの産出が確認された。データ分析を通して、予めバイ

6) BM は冒頭の登壇者紹介で通訳を担い、BS が当該トークショーの通訳を担うと紹介して以降は発言することはなかった。

リングル場面として準備されている場においてトランスランゲージングが産出される過程を詳細に見ていきたい。

4. データ分析

30分のトークショーの展開は6つに分けられ、(1)登壇者の紹介、(2)JS1によるストリート・ラグビーの紹介、(3)JS2によるラグビー日本代表の動勢、(4)IEによるアイルランドのラグビー人気、最後に(5)ラグビーワールドカップ開催に向け期待や意気込みが語られ、(6)応援ソングで締めくくられた。本論では展開2から、バイリングル場面が了解される初期の場面と、トランスランゲージングの産出が認められた中盤の場面から抜粋する。後者は展開3から展開4に移行する場面でもあった。抜粋部の前後に起きた出来事との関連も交えて分析する。

4.1 バイリングル場面の了解

抜粋1は総合司会者のJMが登壇者の紹介を終え、最初の話題として、ストリート・ラグビーについてJS1に説明を求める場面である。冒頭の紹介の通訳は人物毎にBMによる逐次通訳で行われた。この場面では相互作用的な対談に通訳BSを交える進め方、すなわちメタコミュニケーション⁷⁾が確認された場面でもある。ここでは通訳の役割について、JMとBSの間に認識の差があったことも露呈する。すなわち、この場面は、バイリングル場面についての合意がなされる場面でもあるが、翻って事前に摺り合わせがなかったことも示している。

抜粋1

- 1 JM: もう直球ですよ、ストリート・ラグビーってなんですか、これは
- 2 JS1: ええとですね、今日も、あの一この裏っかわに、ラグビー場を引いて＝

7) メタコミュニケーションという語は多義的に用いられるが、ここでは、コミュニケーション参加者が、今参加しているコミュニケーションがどのような種類のものなのかを言語化して説明したり、示したりすることの意味で用いる (cf. Silverstein, 1993)。

トランスランゲージングの遂行性

- 3 JM: =ましたね
- 4 JS1 ええ、横幅が7メートル、縦が18.5メートルのちっちゃなグラウンドで=
- 5 JM: =(観客に向かって)ご覧になりました? みなさん? ね
- 6 JS1: (観客に向かって)まだ、ご覧になってない
- 7 A: (うなづく、首を横に振る)
- 8 JS1: ですかね、是非帰りにでも見てください
- 9 JM: はい
- 10 JS1: あの3人対3人でやるラグビーなんです
- 11 JM: 3人対3人
- 12 JS1: 3人対3人
- 13 JM: ほーーー
- 14 JS1: 本来、あの、みんなが、選手達がいてっていうのは、7人とか15人なんですけど
- 15 JM: そうですね、多いですけど、コンパクトに出来るっていうことで3対3ですよ
- 16 JS1: そうなんです、で、3対3で、まずひとつはですね、日本の道路の、道に、道路
- 17 に出ていただく、ラグビーってやっぱり僕ら競技場に来ていただいて見ていただ
- 18 くしかないので
- 19 JM: そうですね
- 20 JS1: そうなんです、で、それをこう、町の中に(プレイヤーが)出て行って、えー、で
- 21 きるだけみんなに見ていただく、もしくはみんなにプレイしていただく、そうい
- 22 う新しいゲームなんですね……
- 23 JM: BSさん、このへんあたりまで、英語で言っただけです?
- 24 BS: (IEを指し示しながら)やってるやってる
- 25 JM: (観客席を指し示しながら)こっちに、こっちに
- 26 BS: あ、そこかー はははは
- 27 JM: そこですよー はははは
- 28 BS: こっち(IE)に必死に
- 29 JS2: ぼくもそう思っていました
- 30 JM: そっちの端っこの方でずっとしゃべってるんで

- 31 BS: (通訳なしでも) いいじゃない, もう
32 JM: でも外国の方, いらっしゃいますよ
33 BS: Is there somebody need translation? Or is everyone fine with Japanese? Do you
34 want English?
35 A: Yah, yah.
36 BS: Do you want English? Okay. ここまで全部話せていうのはそりゃ無理でしょ
37 う。どう考えても
38 JM: じゃあ, まずは, このストリート・ラグビーの=
39 BS: Okay, so, so, basically they are talking about the street rugby. The street rugby is
40 played by three by three. And there, basically, ummm, the place is behind there, to
41 get to know the rugby to more people, like, rather than making people to go to big
42 stadiums, you can actually do three by three rugby anywhere, so we hope that more
43 people will appreciate rugby. いいよね?
44 A: (客席から拍手)
45 BS: Okay!
46 JM: ありがとうございます。そういうことです。
47 BS: (笑いながら) 無茶振りだよ

JM は対談開始直後, フェスティバル会場内でも設営されている「ストリート・ラグビー」は何かという「直球」の質問を投げかける。JS1 の説明が始まるが, JM はしばしば途中でコメントを挟み, JS1 はそれを受けつつ話を進めていく。JM と JS1 のやりとりは活発かつテンポ良く進んでいく。声の調子から, JS1 は「ストリート・ラグビー」という名称が持つ「ストリート」の意味の説明(16行: 道, 道路)にこぎつけようとしている様子が見取れる。「道(ストリート)・「町なか」でできるラグビーである, という点に到達して語りの区切りとなる。

この区切りを受けて JM は, BS に英語への通訳を促すが, BS は「(既に通訳を) やってる」(24行)と応じる。ここではじめて BS は, 通訳は IE に対す

る通訳ではなく、観客に対して期待されていることを知ったと表明する。BSのIEに対するウイスパリング通訳は、JMに「(舞台の) 端っこの方ですっつとしゃべっている」(30行) 行為と表現されている。場合によっては「私語をしている」ことへの批判とも受け取られかねない表現である。

JMは観客に対する英語通訳の必要性の根拠を、観客の中の「外国の方」(32行)の存在に求める。BSはJMの意向を受けてではなく、客席に英語通訳が必要かを問いかける。聴衆からは、英語通訳を歓迎する反応が出(35行)、BSは重ねて確認した上で了解するものの、これまでのやりとりを全部通訳することは「そりゃ無理」(36行)と難色を示す。通訳が必要な内容を要約しかけたJMを遮り、ストリート・ラグビーについて彼らが話していたことを前置き、その内容を簡潔に説明する。説明の最後に、「いいよね?」(43行)と観客に呼び掛け、拍手を認めて「Okay!」(45行)と締めくくっている。

抜粋1では、日本語での相互作用領域と、英語での相互作用領域の間に、明確な境界が認められる。冒頭が日本語世界であることは、JMによる「このへんあたりまでを英語で」というBSへの依頼によって顕在化される。はじめは通訳に難色を示していたBSが初めて英語に切り替える場面では、それまでのJMとの対話をやめ、観客に呼び掛けている。この、話しかける対象の切り替えが、日本語世界から英語世界への切り替えの指標ともなっていると見て取ることができる。続く36行で「okay」と通訳することを了承した後の発話「ここまで全部話せていうのは……」は、司会進行を司るJMに対するものと見て取れ、ここでも英語世界から日本語世界への切り替えが認められる。

BSが、日本語で話された内容を英語に要約して通訳する場面(39-43行)は、最初の英語場面(33-36行)と異なる面が見出される。通訳を終えたBSの「いいよね?」(43行)は、JMに対してではなく観客に向けられている。観客はそれに拍手で応じ、BSは「Okay!」と通訳を終えたことを合図する。この「いいよね?」は、「通訳を適切にしましたよね?」という確認であると考えられる。ただし、それまでの日本語世界でのやりとりを、英語に適切に置き換えられたかどうかを判断できる人は、日英語のバイリンガルである。BSは英語の通訳

が必要な（日本語を理解しない）観客の存在を確認し、観客に対する英語への通訳という役割を引き受け、なおかつ通訳の適切性を日英語バイリンガルである観客に確認しているのである。このことから、「いいよね？」（43行）という短い挿入は、英語のみを理解する観客から、日英語バイリンガルの観客へと対象の切り替えを指標した日本語と考えられよう。

この抜粋場面の末尾では、「無茶振りだよ」とJMの司会進行に対する批判めいた発言が認められるが、笑いを伴い緩衝させており、険悪な雰囲気にはなっていない。以降、日本のラグビー事情についての対談が進められたが、JMによる促しがなくとも、意味の切れ目で通訳をするという、日本語世界と英語世界が切り替えられて進んでいく過程が見られた。

まとめると、抜粋1は、トークショーを進めるにあたり、モデルとなるような対話スタイルが交渉を経て産出され、了解された場面と言えよう。日本語と英語が交互に切り替えられる二つの言語世界の存在（バイリンガル場面）は、この対話の中でメタコミュニケーションに言及する「英語で言っただけですか？」（23行）や、「Is everyone fine with Japanese?」（33行）、「Do you want English?」（33-34行、36行）によって明示的に枠付けられている。ここで確認されたバイリンガル場面は、英語話者と日本語話者が舞台上にも観客にもおり、それぞれの話者グループ内および向けのコミュニケーションが適宜切り替えられて進められるというものである。

トークショーでは中盤以降、このバイリンガル場面が崩れるコミュニケーションが見出された。その中には日本語話者あるいは英語話者集団のいずれかに偏った場面もあったが、話者集団間の境界線が曖昧になる場面も見出された。すなわち言語場面の切り替えを明示せずにコミュニケーションを成立させようとする場面である。本論では、こうした実践をトランスランゲージング場面とし、その談話で遂行されている事柄は何かを探究していく。

4.2 トランスランゲージング場面

以下の事例（抜粋2）は、30分間のトークショーで、18分程度経過した時点

トランスランゲージングの遂行性

である。これ以降、トランスランゲージングが増えていく傾向も見られた。抜粋1を含む展開2の対談では、JS1は日本や海外のラグビー事情について統計データなども交えて話していた。この間は、やや制度化された、いわば安定したバイリンガル場面で進んでいた。展開3で中心となった話し手JS2は、日本代表選手であり、話題はオフの過ごし方や、選手間の話など、チーム内の様子が中心となった。それはラグビー日本代表チームの顔ぶれや成長過程、最近の戦績などある程度共有していることが前提に進められ、そのせいか、通訳そのものがなされずに、日本語のみで進む時間も増えていった。トランスランゲージング場面の出現は、話題が日本代表の動勢(展開3)から、アイルランドのラグビー人気(展開4)へと移行していく局面に重なっている。なお、特にトランスランゲージング場面と判断される手がかりとなる箇所¹に下線を付す。

抜粋2

- 48 JM: で、みなさん、JS2選手、日本代表がどのように成長していると感じています？
- 49 JS2: これから強いチームと闘って、より日本も強くなる、そういうテストマッチが多
50 く開催されますので、その中の1つとして、6月にアイルランド代表と試合をし
51 ます。Ireland and Japan will match!
- 52 A: = Yah! (会場から拍手、口笛の音)
- 53 BS: = Wow!
- 54 JM: そこでアイルランド絡めてくるの
- 55 BS: すばらしい! Wow!
- 56 JS2: アイルランドでどのぐらい人気かちょっと聞いてみます。(IEに向かって) どうな
57 んですか、アイルランドで？
- 58 BS: How, how popular is rugby in Ireland?
- 59 IE: We are very big fans. It is one of our national sports, of course, and I'm very proud
60 of our rugby team and the team is very well and, and we are very proud of them.
- 61 BS: ラグビーというのは、アイルランドのナショナルスポーツだと、で、みんなほん
62 とにラグビーが好きで非常にラグビー、アイルランド強いので、非常に私も応援

- 63 しています, そんな感じです
- 64 JM: Wow! じゃあアイルランドとね, 闘うわけだよ
- 65 JS2: そうですね, さっきから (IE と) バチバチ, 一言もしゃべってません
- 66 BS: You're gonna be fighting against . . . in June, right? So Japan and . . .
- 67 IE: We're friends right now but probably not later.
- 68 BS: 今は友達だけど後は分からないって
- 69 JM: あはははは, いや, それだけやっぱりね, 自分の国の信じてね, 応援して
- 70 BS: You're believing in Irish team?
- 71 IE: (うなづく)
- 72 JM: どうなんですか Japan or Ireland, どっちが勝つか予想してください
- 73 JS3: にはーーん!
- 74 BS: She is saying Japan will win.
- 75 IE: Yah, Japan will win. I'm sure it will be a great game. And the best men will win.
- 76 And I will be supporting my team.
- 77 BS: すばらしい! まあ強い方が勝つということですね
- 78 JM: (JS2 に向かって) 実際問題どうなんですか
- 79 JS2: Of course! 今, もちろんランキングはアイルランドの方が上なんですけど, 日本
- 80 もワールドカップから強くなってきていますので
- 81 BS: じゃあさ, 賭けようよ
- 82 JM: それ一番やっちゃいけないこと。モザイク入れなきゃ
- 83 BS: 食事とか, いいじゃん
- 84 JM: ああ, そういうの
- 85 BS: 勝てば, 彼 (JS2) がおごる, 負けたら (IE が) キスするとか
- 86 JS2: 僕は大丈夫ですよ
- 87 JM: (笑いながら) なんで英語にしないんですか
- 88 BS: If Japan wins, he is gonna take you for dinner. If Ireland wins, you kiss him.
- 89 JM: 聞かないかと思っていたのに
- 90 BS: Okay?

トランスランゲージングの遂行性

- 91 IE: Okay!
- 92 BS: Okay, 成立。これ賭博禁止法に違反しないよね。
- 93 JM: しない, しない
- 94 BS: 今, モザイクって言われてすごくショックだった。もう映ってんのにさ
- 95 JM: Joke, joke.
- 96 IE: He has to come to Ireland for dinner.
- 97 JS2: もちろんです! Of course, I'll come!
- 98 JM: 意外と JS2 選手あれですね, 弱気と言うか
- 99 JS2: (照れ笑いをしながら) JM さん, 次行きましょう, 次

抜粋 2 は, 日本代表チームの様子を話していた JS2 が, 今後の成長と結びつけて, 3 ヶ月後の日本対アイルランドの試合を告知する。アイルランド・フェスティバルなのにアイルランドに関連付けることなく続けられていたトークショーが, これをきっかけにアイルランドと結びつけられた場面である。

トランスランゲージングが見られたのは, ① 50-55 行, ② 65-67 行, ③ 72-79 行, ④ 95-98 行の 4 場面の特に下線を付した部分で, ②と③の相互作用にはバイリンガル場面への引き戻し, あるいはその試みも認められる。すなわち, 抜粋 2 はトランスランゲージングとバイリンガルが混在し, 行き来する場面を含んでいる。

最初の場面 (① 50-55 行) は, JS2 がこのイベントで最も強調して伝えたい事柄, 日本対アイルランドの試合について, 力強く伝える場面である。あるいは, 「(日本代表は) 6 月にアイルランド代表と試合をします。」と「Ireland and Japan will match!」は表現は異なるものの, 直前の内容を要約的に伝えていることから, 日英語併用のバイリンガル場面に見えるかもしれない。しかし, 明らかにこれまでと異なる点は, 「Ireland and Japan will match!」という発話が, 通訳の BS によってではなく, JS2 自らによって行われたという点である。ここは, 前者は壇上の聞き手に向かって, 後者は観客に向かって, 間断なく, 声量を徐々に上げて発話された。そこから, JS2 が BS の通訳の役割を肩代わりしたと見

るよりも、JS2の一連の発話と見える。また、この場面はトランスランゲージング試行場面としての機能も帯びる。直後のBSの「Wow!」という感嘆表現と客席からの拍手や口笛は、JS2のトランスランゲージング試行が承認された瞬間でもある。

トランスランゲージングの試行、それを支持する観客の反応、およびBSの「Wow!」という感嘆表現の多用に続き、パイリンガル場面の却下が認められる。場面②(65-67行)である。日本とアイルランドの試合があることに絡めてJS2は、隣のアイルランド人IEとの間に会話がなことを敵対心のためであると言及する。もちろん、これは冗談である。二人は終始笑顔であるし、ミス・アイルランドの女性IEは、対戦国を敵視するような熱狂的ラグビーファンという様子はない。BSはJS2のこの冗談を英語に訳そうとするが(66行)、それを遮るかのようにIEは「We're friends right now but probably not later.」(67行)と発言する。IEはJS2の65行の発話について、おそらくJS2の身体動作を手がかりに、6月に行われる試合と、現在の二人の関係性に関わるものであることを察知し、その文脈に沿った発言をしたのであろう。

このJS2とIEの発言は、実際にはかみ合っていない。JS2は二人が隣同士に座っていながら一言も交わしていない理由を、日本人とアイルランド人の間の敵対心においている。IEは、現在こうして一緒にトークショーに参加していることからJS2と「友達関係にある」(67行)と言っている。ただし、将来的には関係が破綻するかもしれないと言い、その理由はやはりラグビーの試合から生まれる敵対心である。つまり両者の発言には、現在の関係性と敵対心が生まれる時期の面で齟齬が認められる。それでも、もうすぐ行われる試合と二人の関係性について話題にしているという面では符合している。この場面は、日本語世界と英語世界の切り替えによる進行が退けられる場面でもあり、トランスランゲージングへの移行を許容する相互作用と見てよいだろう。

一度崩されたかに見えたパイリンガル場面は、BSの間髪を入れない日本語訳(68行)によって、一旦引き戻される。しかし、以降もトランスランゲージング場面が頻出する。

続いて興味深いのは、トランスランゲージング場面が認められるようになったところで「賭け」の話題となった点である。BSがJS2とIEの間の賭けをもちかける。「賭け」の内容についての語りは、法律（「賭博禁止法」92行）や、記録・報道（「モザイク」82, 94行）、通訳の回避（87行）など、関連付けられる領域が散逸する傾向が認められる。加えて、賭けの内容が不明瞭なことも手伝って、複雑な談話構造となっている。丁寧に見ていこう。

最初のBSによる提案「勝てば、彼（JS2）がおごる、負けたら（IEが）キスするとか」（85行）は、どちらが「勝てば」なのか、主語が省略されているため明確ではない。日英語通訳を担ってきたBSが日本語で対談に参加している場面なので、日本人目線で話していると考え、主語は「日本が……」で始まると考えるのが普通のように感じる。しかし、賭けの成立要件から考えると、アイルランドが勝てば日本人選手がアイルランド人にご馳走し、アイルランドが負ければ、アイルランド人女性が日本人選手にキスをする、と理解するのが論理的である。同時に、仮に日本人選手が「ご馳走する」ことになったとしても、相手がミス・アイルランドであることから、「賭け」としては、どちらに転んでも日本人選手にとって好ましい帰結になるとも考えられる。JS2が「僕は大丈夫ですよ」（86行）と「賭け」に乗ったのは、日本が勝つという自信によるものかもしれないし、結果、どちらに転んでも良い話であるからかもしれないし、そもそもこの提案全体が冗談であると分かっているからかもしれない。

BSとJS2の駆け引きを面白がりながら、JMはその部分を「英語にしない」（87行）ことを揶揄する。この発話で賭けをめぐる談話が日本語モノリンガルで進められていたことが顕在化する。ただし、ここでもJMの談話の意味は複数の解釈可能性が認められる。国の代表の試合結果を「賭け」ることを隠匿する行為と、賭けの内容がどちらに転んでも男性に有利な設定になっていることを隠匿する行為⁸⁾、どちらへの指摘とも取れる、不明瞭な発話である。

8) 当該トークショーを通して女性参加者の発言場面が限られていることに加え、賭けの話題の内容には男性優位な面が垣間見られる。この点はトランスランゲージングがパワー関係の変容に及ぼす可能性に注目する本研究において看過すべきではな

英語で IE に伝えないことを指摘された BS は、すぐさま英訳して伝える。すなわちバイリンガル場面への引き戻しが確認される。同時に、ここで 85 行目の省略された主語は、アイルランドではなく日本であったことが言明される。「賭け」の内容は、日本が勝ったら JS2 が IE にご馳走し、アイルランドが勝ったら IE が JS2 にキスをする、というものである。しかし、この条件は、ミス・アイルランドが日本人ラグビー選手にキスをする権利を得たいと考えるのが普通だという社会通念がなければ成り立たない。そのため、BS はそもそも「賭け」の論理を取り違えているのだと理解される。これは、BS の思慮不足や論理破綻というよりは、「賭け」そのものが端から冗談であることを示していると考えた方がよいだろう。

「賭け」は冗談だということが明らかなので、この賭けの論理に誤謬があることは、日本語であれ、英語であれ、誰も気にとめない。IE も即座に、BS に提案された「賭け」に乗りつつ、ご馳走するために JS2 はアイルランドに来なくてはいけない (96 行) と付け加える。JS2 は通訳を待たずに、「もちろんです！ Of course, I'll come!」(97 行) と応じる。この発言は快活になされた。これは、「日本が勝ったら、IE とディナーを共にできる」と認識して快諾したとも考えられるし、日本が勝つか負けるかに関係なく、IE とディナーを共にするのは望ましいことだから快諾しているとも考えられる。あるいは、全体が冗談なので、場が盛り上がるように対応しているとも見える。

この反応に違和感を表明するのが JM である。JM は、IE にご馳走することを積極的に考えるということは、日本が負けることを予測している、あるいは負けても良いと思っていると理解したのだろう。「意外と……弱気」(98 行) と指摘する。その点を突かれた JS2 は「次行きましょう」と、この話題そのものを終えるよう提案し、実際に「賭け」の話題に戻ることはなかった。しかし、この一連のやりとりは「賭け」を持ち出したところから辻褃の合わないことが

いが、抜粋した場面だけでは参加者のジェンダー観を同定するディスコースが十分でないこと、ジェンダーについて論じるには翌日実施された女子日本代表のトークショーについても見ていく必要があることなどから、ここでは扱わず、今後の課題とする。

そのままに続いているのである。個々の発話は、互いの意図について曖昧なまま続けられている。

抜粋2の後半部、「賭け」の話題が出てからの相互作用をまとめる。トランスランゲージングがトークショーのコミュニケーションとして認められてほどなく「賭け」の話題が持ち出された。賭けの条件提示と JS2 による承認はモノリンガル場面となっていた。それを顕在化させているのが JM の批判めいた発話「なんで英語にしないんですか」（87 行）である。これを合図にバイリンガル場面に一旦戻されるが（88 行）、再びトランスランゲージング場面となる。つまり、抜粋2はトランスランゲージングが試行され、承認され、共有された場面と見ることができよう。

5. 考察

以上のデータ分析を踏まえ、当該事例においてトランスランゲージングによって何が遂行されたのかを考察していく。

第一に参与者の包摂である。前節で詳細に見たとおり、JS2 による「Ireland and Japan will match!」は、それまで切り分けられてきた日本語聴衆と英語聴衆の垣根を取り払い、全体への呼び掛けをしている。これまでの相互作用を通して、「日本語＝日本人＝ラグビーに馴染みが薄い」が日本チームの躍進は知っている、「英語＝外国の方（アイルランド人）＝ラグビーファンだが日本チームについては知識がない」と切り分けられていった属性を一気に取り払い、会場を盛り上げ、一体感を作り出している。

第二にカジュアル化の補強である。トランスランゲージングが産出される場面には多面的なカジュアル化が確認される。まず、話題である。それまで日本におけるラグビーの普及率や、日本チームの戦績、チーム目標等について語られていたのが、テストマッチの勝敗をめぐる「賭け」の話題に転換した。食事やキスを賭けることは、法律に触れないまでも、公式な対談などでは出にくい話題であろう。同時に、「じゃあさ、賭けようよ」（81 行）という BS の発話には、バイリンガル場面（たとえば 63 行や 77 行）に使用されていた敬体が消え

ている。ここは日本語モノリンガルとなった場面でもあるが、その指摘を受けトランスランゲージングが進められた場面でも引き続きカジュアル体が確認される。コミュニケーション・スタイルのカジュアル化はBSに限らない。JMによる「Japan or Ireland, どっちが勝つか予想してください」(72行)という問いかけに、JS3は「にほーーん！」(73行)と大きな声で応じる。単語だけを間延びして発しているところにカジュアルさが感じられる。また、この返答は日本語が選択されているが、JMのトランスランゲージングによる問いかけを無効にし、バイリンガル場面に引き戻しているというよりも、「Japan」と答えても「日本」と答えても、どちらでも良いという自由さからくるものと見える。すなわち、ここでのやりとりは言語境界を曖昧にしている。

第三に、意味の伝達よりも、話者間の関係性が重視されていることが窺える。テストマッチに先駆け、JS2が「……(IEと)パチパチ、一言もしゃべっていません」(65行)と言う。その発話内容を確認せず、IEも2人の関係性について言及する。後のBSによる「賭け」の提案についても、内容的には不明瞭な点があるが、そこはあまり留意されることなく、賭けを成立させることで話が膨らむ、場が盛り上がるという面が重視されている。バイリンガル場面からトランスランゲージングへの移行によって包摂された参加者が、気軽に会話に参加することが重視され、厳密な意味内容の伝達については優先順位が低くなっている様子が見て取れる。結果的に個々の発話については、さまざまな解釈が可能となり、ディスコースの解釈は不明瞭になる傾向が見られた。

第四に、メタコミュニケーションの流動化である。トランスランゲージングに移行した後も、バイリンガル場面は適宜挿入されている。それは承認、参照されることもあれば、却下、無視されることもあり安定はしない。さらにモノリンガル場面(81-86行)も生み出される。これは、賭けという行為そのものや、その条件についての後ろめたさが、英語話者であるIEに知らせない、という戦略的なモノリンガル場面ではないかと揶揄されている。もちろん、賭けそのものが冗談であるし、JMが勧ぐる戦略的かつ排他的なモノリンガル場面の指摘に接し、BSはすぐさま通訳をした。そのため、結果的に参加者の誰か

が排除されるような事態は招いていない。しかし、この事例から、トランスランゲージングの導入とカジュアル化の共起は、メタコミュニケーションの流動化とも共起しており、場合によっては突如持ち込まれるモノリンガル場面などによって、参加者の誰かが不利な状況に置かれる危険性もあることを示唆していると言えよう。

このように、やや制度化されたバイリンガル場面において、トランスランゲージングが、参加者の包摂、カジュアル化の補強、関係性重視、メタコミュニケーションの流動化と共起していることが見出された。その代償として話者の意図が曖昧なまま進んでいくという面も確認された。

日本語を解さないIEがトランスランゲージングに積極的に参加したことは、日本とアイルランドの友好という観点から見ても、フェスティバルやトークショーの目的に適っていると見えよう。それは、会場の一体感や盛り上がりにも貢献している。しかし、同時に話題のカジュアル化とモノリンガル場面の出現にもつながっている。話題のカジュアル化は場の盛り上がりやエンターテインメント性に寄与しているとも言えるが、詳細に見ていくと、BSが提示した「賭け」の内容が、どちらに転んでも男性にとって好ましい結果を生むことや、少なくとも日本の文脈においてスポーツと賭博の関係が非常に神経質になるべき話題であることなどについては、IEをはじめとする英語話者には伝わっていない。全体的に話題が冗談の範疇に類するものであることは、IEも認識していたであろうが、この点を類推させるJMの「Joke, joke」(95行)は、録画しているトークショーのBSの顔にプライバシー保護のモザイクを入れることについてであり、この場の中心的な話題である「賭け」についての言及ではない。

すなわち、この事例において、トランスランゲージングは、話題や話し方のカジュアル化と共に、舞台上の人々が思い思いに言語資源を駆使して発言する自由な雰囲気形成に寄与しているが、その自由さにはモノリンガル場面への移行も含まれていることも忘れてはならない。その談話構造やメタコミュニケーションの展開は、重層のかつ流動的になり、総じて複雑になっていることが見て取れる。参加者が持っている言語資源で、対話に参加することは開かれてお

り、確かに会話は活発になっているが、そこでやりとりされている事柄の細部を把握するには、社会文化的知識を兼ね備えていることが求められる。

この賭けをめぐるやりとりでは、IEに限らず、参加者の誰も厳密な意味にこだわってはいない。全体の一体感や、エンターテインメント性とトランスランゲージングは共起関係にあるという見方もあろう。しかし、日英語という観点で見ると、トランスランゲージングに用いられている英単語は、日本語の中にもカタカナ語として入り込んでいる語を中心とした単語単位のものに限られている。それに対し、やりとりの中で共有されている共通認識には含みも多く、話題の展開速度も速く、日本語コミュニティに属していない参加者にとって全容を把握することは難しい。つまり、その場への参加という意味では、トランスランゲージングは話者の力関係の対等性を実現させているが、細部の理解やメタコミュニケーションの切り替えへの俊敏な対応という意味では、バイリンガル場面よりその場の情報弱者が不利益を被る可能性があるということが指摘される。

6. おわりに

本論は東京・代々木公園で実施されたアイ・ラブ・アイルランド・フェスティバルにおけるトークショーのディスコース分析を元に、トランスランゲージングの遂行性を分析した。この事例は国を冠したイベントのメインステージで、通訳が配置されており、バイリンガルでの進行が想定されていた、相対的に公共性の高い場面のものである。本事例でトランスランゲージングが生み出された状況には、通訳をどのように介在させるかについて参加者共通の了解や経験がなかったことを確認した。そのような状況下で産出されたトランスランゲージングの遂行性は、①参加者の包摂、②カジュアル化の補強、③関係性の重視、④メタコミュニケーションの流動化と共起していることが見出された。

参加者の包摂については、舞台上の英語話者による積極的な参加によって、トランスランゲージングが促進された面も見られた。同時に、それまで言語話者別に切り分けられてきた聴衆の境界線をなくし、会場に一体感をもたらした。

今後、これらの共起項目について、誘因関係も含めた分析と考察が必要になる。少なくとも、本事例からは談話構造やメタコミュニケーションが複雑になることが確認された。このため、トランスランゲージングに参加するための言語レパートリーを豊かに持っていない参加者にとっては、不利益が生じる可能性も示唆された。その場における関係性を重視した実践であることは見出されたが、それが長期的に見て対等な、近い関係の維持を約束するものになるかは疑問が残るところである。トランスランゲージングの遂行性については、その場面ごとでの分析に加え、参与者間の関係性に長期的に及ぼす作用についても見ていく必要があるだろう。

Garcia & Wei (2014) は、トランスランゲージングが関係性変容に寄与することの意義を強調しているが、トランスランゲージングがそのようなはたらきを担うためには、トランスランゲージングを通して新たに作り出されるであろう参加のための言語資源の内実を丁寧に見ていく必要がある。そのような視座を欠いたトランスランゲージングの導入は、別の不均衡な力関係を生み出すことにつながりかねない。

最後に、方法論的な観点から、本研究の課題と展望を示す。本論は、話者が持ち備えた言語システム全てを駆使して言語活動に参加するとするトランスランゲージングが、私的な場面での実践例にとどまっているならば、根本的な言語観の見直しには到達し得ないという問題意識に立ち、公共的な場面での実践例に注目した。バイリンガル場면을想定していた場面で展開されたトランスランゲージングに注目した点で独自性を備えている。そうした問いの設定上の問題も手伝って、トランスランゲージング場面の分析においても、結局はバイリンガルという参照枠に依拠していることを認めざるを得ない。名付けられた言語の境界線を研究者が持っているからこそ、その境界線が曖昧になる場面を同定できるわけである。トランスランゲージングが、バイリンガルの基盤の上ではなく、バイリンガルを転換し得る理論に発展するまでには、それを説明する言語理論を築き上げていく大きな課題が残されている。そのためには、相互作用秩序 (Goffman, 1983) の様々な場面から事例研究を蓄積させ、場面間や領

域間のつながりなども探究していく必要がある。

トランスランゲージングの存在論については、本稿ではディスコース分析を通して同定したが、Rampton (2016) が指摘する通り、話者の言語イデオロギーという面からの観点も必要であろう。本論では参与者に対するインタビュー等は実施していないため、彼らの主観にはアプローチできていない。トランスランゲージングの存在論については、現象から捉える観点と、話者の主観の観点など、複数が考えられる。その点についての方法論の検討も今後の課題となる。

談話実践としてのトランスランゲージングはあらゆる社会領域における言語活動に認められ、それらもまた互いに相互作用を及ぼしあいながら我々の言語やコミュニケーションの有りかたを方向付けていくであろう。Rampton (1997) は、我々の研究は普遍性に基づいた現代主義に傾倒しがちだという。それよりも社会の現状をもっと複雑な対象と捉え、研究の断片性・随伴性・末端性・推移性・不確定性・両価性・雑種性に注目し、拙速に普遍性を追求することに警鐘を鳴らしている (p.330)。Block (2012) も、社会的・心理的事象を普遍化するよりも、幅広い事象に基づく事例からの解釈そして取り上げられがちなコンテキスト以外での検証を呼びかけている (p.132)。今後も多様なコンテキストを取り上げ、検討していくことが必要である。

謝辞

本研究は JSPS 科研の助成 (基盤 (C) 16K02698 「多言語公共空間の形成とコミュニケーション秩序」研究代表者: 猿橋順子) を受けています。最後に、長年にわたり『青山国際政経論集』の編集に携わってくださった品川奈々子さんに心からの感謝の意を表します。品川奈々子さんは本誌の編集をはじめ、私の研究活動をいつも励まし、支援してくださいました。品川さんの誠実で堅実な研究支援のお陰で、私の今があると思っています。本当にありがとうございます。

【引用文献】

- Bernstein, Basil (1972). A sociolinguistic approach to socialization: With some reference to educatability. In Gumperz, John J. & Hymes, Dell (Eds.), *Directions in sociolinguistics: The ethnography of communication*, pp. 465–497. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Block, David (2012). ‘McCommunication’: A problem for SLA. In Block, David & Cameron, Deborah (Eds.), *Globalization and language teaching*, pp. 117–133. Oxon: Routledge.
- Blommaert, Jan (2010). *The sociolinguistics of globalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blommaert, Jan & Rampton, Ben (2016). Language and superdiversity. In Arnaut, Karel, Blommaert, Jan, Rampton, Ben, & Spotti, Massimiliano (Eds.), *Language and superdiversity*, pp. 21–48. New York: Taylor & Francis.
- Creese, Angela & Blackledge, Adrian (2010). Translanguaging in the bilingual classroom: A pedagogy for learning and teaching? *The Modern Language Journal*, 94 (1), 103–115.
- Ferguson, Charles A. (1959). Diglossia, *Word*, 15 (2), 325–340.
- Fishman, Joshua A. (1967). Bilingualism with and without diglossia, diglossia with and without bilingualism, *Journal of Social Issues*, 23 (2), 29–38.
- Garcia, Ofelia & Wei, Li (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. London: Palgrave Macmillan.
- Gee, James P. (2014). *An introduction to discourse analysis: Theory and method, Fourth edition*. London: Routledge.
- Goffman, Erving (1983). The interaction order: American Sociological Association, 1982 Presidential address. *American Sociological Review*, 48 (1), 1–17.
- Jørgensen, Normann J. (2008). Polylingual languaging around and among children and adolescents. *International Journal of Multilingualism*, 5 (3), 161–176.
- 韓嘉雯 (2018). 「中国人留学生を対象とした読解活動をささげるアクティブ・ラーニング——トランス・ランゲージングと批判的思考に焦点を当てて」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』 14, 89–104.
- 加納まゆみ (2016a). 「トランス・ランゲージングと概念構築——その関係と役割を考える」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』 12, 77–94.
- 加納まゆみ (2016b). 「トランス・ランゲージングを考える——多言語使用の実態に根ざした教授法の確立のために」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』 12, 1–22.
- Myer-Scotton, Carol (1993). *Social motivations for code-switching*. Oxford: Clarendon Press.
- Neustupný, Jiří V. (1994). Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, Thiru, & Kwan-Terry, John (Eds.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution*. pp. 50–69. Singapore: Academic Press
- Pennycook, Alastair & Otsuji, Emi (2015). *Metrolingualism: Language in the city*. Oxon: Routledge.
- Rampton, Ben (1995). *Crossing: Language and ethnicity among adolescents*. London:

- Longman.
- Rampton, Ben (1997). Second language research in late modernity: A response to Firth and Wagner. *Modern Language Journal*, 81 (3), 329–333.
- Rampton, Ben (2016). Drilling down to the grain in superdiversity. In Arnaut, Karel, Blommaert, Jan, Rampton, Ben & Spotti, Massimiliano (Eds.), *Language and superdiversity*, pp.91–109. New York: Taylor & Francis.
- 猿橋順子 (2017). 「異国フェスの言語政策論的分析——台湾フェスタのステージトークを事例として」『青山国際政経論集』 98, 53–77.
- 猿橋順子 (2018). 「国フェスの今日の特徴——エスノグラフィックなフィールド調査からの分析」『青山国際政経論集』 101, 89–106.
- 猿橋順子・岡部大祐 (2017). 「国フェスに見るディスコースの共有と転換——ミャンマー祭りを事例として」『多文化関係学』 14, 3–21.
- Sakamoto, Mitsuyo & Saruhashi, Junko (2018). Exploring concepts in translanguaging: An alternative view. *Sophia Linguistica*, 67, 59–68.
- Sakamoto, Mitsuyo & Saruhashi, Junko (in press). Applying translanguaging concepts in language education in Japan: A discussion on perspectives behind recent case studies. *Sophia Linguistica*, 69.
- 佐々木倫子 (2015). 「バイリンガルろう教育実現のための一提案——手話単語つきスピーチからトランスランゲージングへ」『言語教育研究』 5, 13–24.
- Silverstein, Michael (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In Lucy, John A. (Ed.), *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics*, pp. 33–58. Cambridge: Cambridge University Press.
- Spolsky, Bernard (2009). *Language management*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vertovec, Steven (2007). Superdiversity and its implications, *Ethnic and Racial Studies*, 30 (6), 1024–1054.
- Wright, Sue (2016). *Language policy and language planning: From nationalism to globalization*. London: Palgrave Macmillan.